

北大経済学部におけるOR・情報処理教育

北大文系の入試はI、II、IIIの3系に分けて行なわれている。経済学部は数I、数II Bを2次試験で課する文II系から定員の75%の120名を受け入れており、数理系には比較的強い学生が進学してくるといえる。

教養部(事実上、入学後の1年半)では数I(線形代数)・数II(微積分)各4単位、情報処理概論・情報科学・統計学各2単位などが、OR・情報処理に関係の深い科目である。

経済学部においてOR・情報処理関係の講義が開講されたのは昭和45年のことである(オペレーションズ・リサーチ・4単位)。昭和50年代に入ってから、管理工学・情報処理論(各4単位)が開講されて今日にいたっている。他にも、統計解析、KJ法、社会調査法などを関連技術として教える教官が数人はいるものの、講師以上30数名の中で、はっきりOR・情報処理に関係しているのは筆者1人である。最低、あと1人は関係教官を増やしたいものと希望している。

こういう状況では、当然のことながら、学部全体としてみると方法論の基調は、OR・情報処理の問題解決型とは異なり、状況説明型であって、これがきわだった不便と感じている。問題解決型の発想や、数式やコンピュータといった道具類に対するなじみがないのである。

これは当面どうしようもないことなので、その一部なりとも克服すべく、“情報処理室”を設置した。これは、マイコン(7セット)、日本語ワープロ、大型計算機センターや情報処理教育センターの端末などを配置した部屋である。という、何ということのないものだけれど、これを学部の全構成員に対して開放しているところが特色あるところだと思っている。コンピュータにじかに触れる機会をできるだけ与えようという意図のもとに、だいたい、いつでも、だれでも、勝手に入り込んで、空いたのがあれば自由に使ってよしいということである。盗難などの事故を心配しいいはじめたのだけれど、無事、円滑に運営されている。前期は情報処理論の実習、後期は筆者のゼミの学生がゼミ論のために、そして通年では教官や事務職員が計算処理や文書処理にと、相当の利用率である。

卒業論文は選択科目であるため履修者がきわめて少ない。しかし、“演習(ゼミ)”なる必修科目があり、学生

は2年目の12月に師事する教官を定め、3年生の4月から、多くの場合、卒業までの2年間、その教官のもとでその学風を学ぶ。演習修了論文(ゼミ論と俗称する)の提出を義務づける教官が相当数あり、これがいわゆる卒論に相当する。ゼミは講座単位ではなく、教官単位に組織されるので、ゼミ同窓会など、卒業後の活動もゼミを中心とするもののほうが活発である。1ゼミ何人という定員もなく、学生の選択にもとづいて各ゼミの所属学生が定まるので、学生数の各ゼミへの分布は年ごとに化する。筆者のゼミではだいたい1学年6人(内女子1)程度が実績であり、また、これくらいが適当だと思っている。

筆者のゼミでは、3年生と4年生合同の演習(約3時間)を週2回ずつ行ない、一方は3年生が、他方は4年生が、各々輪番制で教科書を読みこなしてゆき、4年生の後期にゼミ論を課する、という方式をとっている。現在、7・8期生が在籍している。これまで、OR、シミュレーション、数理計画法、データ・ベース、生産管理などを主題とする教科書を、各学年ごとに1冊ずつ定め、それを読了してきた。1つの学年は、自分たちの教科書、後輩の教科書、先輩の教科書の後半とゼミ論を勉強し、4年目後期に各自ゼミ論をまとめるという経過をたどる。

教官1人で比較的多数の学生の面倒を見なければならず、院生の指導力もあてにできないので、学生の自立的研究を中心にせざるを得ないこと、また、要素的あるいは部分的な研究テーマは当学部の全体的な雰囲気になじまず完結性の高いテーマが好まれること、などにより、ゼミ論のテーマは学生の選択に任せている。別表には、これまでのゼミ論題目の一部を掲げておいた。テーマは広い分野にわたっていて、指導する側の力不足から、突込みの不足するところが残るのもいたしかたないと諦めている。しかし、正直のところは、毎年、普通の学力からは予想もできない研究能力の高さにおどろかされる。

これまでの筆者のゼミからの卒業生は計35人であり、統計をとって何かの結論を出すには時期尚早であるが、就職先は、金融、電機、自動車、システム/ソフト、サービス、放送、官庁など、また、規模も超大企業からベンチャーに近いものまで、きわめて広範囲に分布してい

表 1 セミ論題目一覧 (一部)

<ul style="list-style-type: none"> ・資材所要量計画 ・ネットワーク最短路アルゴリズムの比較・検討 ・野球における総合的打撃成績評価尺度 ・物価変動を考慮した設備更新問題についての考察 ・目標計画法を用いた札幌市の地下鉄の最適運行スケジュール分析 ・GPSLによる品質管理図の自動作図 ・就職ガイダンスのための情報ファイルシステム ・Development of a Railroad Information System ・袋物セメントの配送計画システム ・着手可能時刻を考慮した単一機械スケジューリング ・Additive Implicit Enumeration 法の効率に関する研究 ・Group Scheduling Problem における Revised Lower Bound の有効性の検討 ・展開表による財務管理 ・山くずし法による日程管理 ・持参金問題とゲームの理論 	<ul style="list-style-type: none"> ・不確実性を考慮した損益分岐点分析 ・多品種少量生産における工数計画 ・購入資金に制約がある場合の多品種在庫管理における在庫管理政策 ・動的ジョブジョブにおけるディスパッチングルールの検討 ・キーワードによる検索が可能な小規模図書管理システムの開発 ・ARモデルとARMAモデルの比較——外国為替相場を例にとって—— ・確率的ネットワーク計画法の比較——VERTプログラムの移植とその利用法—— ・生協本店レジカウンターのGPS Sを用いたシミュレーション分析 ・コンピュータグラフィックを用いた札幌市交通情報システムの開発 ・mu LISP による文章型アドベンチャーゲームの開発ツールの製作
--	--

る。職種については厳密な区分はむずかしいが、営業、事務、システムの関係がほぼ同程度ずつと推定している。卒業後の進路のこのような極端な多様性は、伝統的な経済・経営学とともに、管理・情報技術を修めた、2極型(?)の人材が育つというところからきていると思われる。

筆者はこの学部へ赴任して以来、ときどき「経済学部で工学ですか」といわれることがあった。そんなときは「下のほうには「工学」がついていますが、上のほうには「管理」というのがついていて、これは伝統的には社

会科学系のテーマですよ」と答えてきた。今日のように情報技術が広く社会生活のいたるところに侵透してくると、特にシステム設計にかかわる局面で、利用者側のバックグラウンドをよく理解できる社会科学系の情報技術者に対する需要がいつそう高まると思われる。情報処理技術者に対比するならば、情報活用技術者の重要性が増すといってもよいかもしれない。それにつけても、2極型の人材を育てるには、在学期間4年間は短かすぎるように感じている。(関口 恭毅)

VIPラッシュをさばく公害研所長

(毎日新聞 10月29日)

筑波研究学園都市にある環境庁国立公害研究所の近藤次郎所長=写真=が「VIPに似合う男」ともっぱらの評判。都市内にある43の国の研究機関のなかでもほとんどのVIPが公害研を訪問先の1つに選ぶためだ。近藤所長が案内した外国人要人はミッテラン仏大統領(57年4月)、胡耀邦中国共産党総書記(昨年11月)ら数多い。

「公害問題への関心が地球的規模で高まっていることと、かつて公害が深刻だった日本が環境問題を克服

しつつあることへの評価では」と、近藤所長。しかし、その裏にはそれなりの努力もあってこそだ。

たとえば、胡耀邦総書記来日のさいには、1カ月間、通勤電車のなかでカセットテープで中国語の猛特訓をした。総書記から「あなたの中国語は私よりきれい」とジョークまじりにほめられたほどだという。科学万博で予想されるVIPラッシュを前に、今度は何語に挑戦?

